

〈文学遺産〉と〈キャラクター〉

—— 古典イメージの展開と現代性

Hiroshi ARAKI (荒木浩 : Professor, International Research Center for Japanese Studies)

✉ hiroark@nichibun.ac.jp

(日本) 国際日本文化研究センター教授。専門は、日本古典文学とその国際的研究。著書に、『『今昔物語集』の成立と対外観』(思文閣人文叢書, 2021)、『古典の中の地球儀』(NTT出版, 2022)、『京都古典文学めぐり』(岩波書店, 2023)、編著に、『〈キャラクター〉の大衆文化——伝承・芸能・世界』(前川志織・木場貴俊と共編, KADOKAWA, 2021) など。

‘Literary Heritage’ and ‘Character’

: On the Development and the Presentness of the Image of the Classics

In this paper, I analyze the cultural contents of Japanese Classics and their images with adapting the two key terms ‘character’ and ‘literary heritage’, both of which I have become interested in recently. I co-edited Volume 4 of the five volumes’ handbook Nichibunken Popular Culture Research Series (2020-2021), *The Popular Culture of ‘Characters’: Tradition, Performing Arts, Worlds*. In the preface of that book, I wrote on “The Popular Culture History of “Characters” and “Worlds””, where I re-examined the key concept of “characters”. In other academic context, I studied the concepts of ‘cultural heritage’ and ‘textual heritage’ in some joint researches, with a particular focus on ‘literary heritage’. By introducing and adopting both these key terms, here I attempt to analyze the development and the presentness of the classic image and its cultural contents in premodern Japanese literature. As some examples of the above, I shed the light on *The Tale of Genji*, *The Tale of Heike* and the work of the poet Bashō in order to identify their relationship with their surrounding literary heritage. As a result, and by reconstructing the concept of ‘readers’, I outline the imaging and development of Japanese classic literature and its modernity.

Keywords Model Reader(モデルリーダー), Horizon of Expectations(期待の地平), *The Tale of Genji*(『源氏物語』), *The Tale of Heike*(『平家物語』), Bashō(芭蕉)

1 〈キャラクター〉と〈文学遺産〉というパースペクティブ

1.1 〈キャラクター〉の大衆文化——伝承・芸能・世界

国際日本文化研究センターの基幹研究プロジェクトとして、2022年度まで、準備期間を含めて7年ほど推進した「大衆文化研究プロジェクト」において、日研大衆文化研究叢書全5巻を発売し(2020-2022)、ひと区切りが付いた。詳細は、その日本語版序論集と同英訳が載る、日研オープンアクセスを参照されたい¹。私は、前川志織・木場貴俊と3人で『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』(KADOKAWA, 2022²)を編集した。

同書は、〈キャラクター〉と〈世界〉を主要なキーワードとして、第1部〈キャラクター〉とはなにか、第2部 美人というキャラクター、第3部 伝承世界とキャラクター、第4部 絵と芸能とキャラクター、第5部 モダンカルチャー・プロジェクションという5部構成からなる。古代から現代へ、という通時的時間の中で、古典文化から伝承世界、能や歌舞伎などの芸能、また現代のアニメやアイドルからゲームまで、多角的に論者を集め、問題の総括と今後の議論のきっかけとしたのである。現在、この大衆文化研究叢書については、全巻の韓国語訳と中国語訳が進められており、より国際的・学際的な視界へ向けて問題提起ができるようになると期待している。

また側聞するところでは、近時「キャラクター」という概念をめぐり、アメリカで、国際シンポジウム“Kyaracters : On the Other Side of Narrative”が開催された。Kyaractersとは、文字通り、カタカナ語「キャラクター」の、ことさらなるローマナイズであるようだ。柳井イニシアティブグローバル・ジャパン・ヒューマニティーズ・プロジェクトの一環として、UCLAと早稲田大学スーパーグローバル大学創成支援事業国際日本学拠点との共催で行われたイベントである。コロナ禍によって、2020年3月開催予定から、2023年4月28日~5月1日開催へと延期されたため、私たちのプロジェクトとも密接に時間を重ねる関心事となった。詳細はwebでレポートが公開されている³。中心となったのは、前掲『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』執筆者の1人でもある、マイケル・エメリック(Michael Emmerich)であることも、興味深いシンクロシティであった。

1 文研オープンアクセス。日研大衆文化研究叢書 全5巻序論集 https://nichibun.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1128

2 記BOOK☆WALKERサイトから、目次と「序」の試し読みができる。 https://viewer-trial.bookwalker.jp/03/15/viewer.html?cid=156e47e7-9651-4074-8bf0-8540cd27a255&cty=0&adpnt=7qM_Nkp

3 稲田大学文学学術院 国際日本学webサイトの「開催報告：国際シンポジウム“Kyaracters : On the Other Side of Narrative”をUCLAにて開催」の報告。下記参照。 <https://www.waseda.jp/flas/gjs/news/3684>

1.2 〈キャラクター〉と〈世界〉——古典世界から現代フランス小説へ

上記論集で、私は「序 〈キャラクター〉と〈世界〉の大衆文化史」を書き、自分なりの学際的総括を試みた。冒頭は、あえて映画『風と共に去りぬ』(1939)をめぐる話題から始めている。

大ヒットした原作の大河小説『風と共に去りぬ』(1936年刊)の魅力的な登場人物たちについて、刊行当初からモデルの所在や人物造形法に詮索をめぐらす読者が噴出して、作者を悩ませたという。作者マーガレット・ミッチェルは「あちらからは、レット・バトラーも嘘っぽいと言われ、こちらからは、ことにレット・バトラーが無名の誰それさんのお祖父さんをモデルにしていると言われ」、「人々は早くも、拙作の登場人物達に実在のモデルを探そうとしているのです」などと不満を漏らす。そして「わたしのキャラクターは、たんなる合成物(コンポジット)です」と書簡で断言したのだ。私は、この作者ミッチェルのキャラクター論に着目したのである。

そして、同上「序」では、歌舞伎の「世界」と「趣向」という文化伝統を承け、古典文学などをめぐる概観をした上で、『源氏物語』の準拠(歴史的には「准拠」の文字が用いられる)と創作(フィクション)との関係を論じた。14世紀の『河海抄』という代表的注釈書が、光源氏の造形について、醍醐天皇の息子源高明というモデル論から説き起こし、「物語の時代は、醍醐・朱雀・村上三代に准ズル歟か」と誌し、『源氏物語』という純然たるフィクションに、歌舞伎の「世界定め」のごときを行っていた(以上の引用は、荒木「序」から)ことを指摘し、あえて「世界」と「趣向」に応用してその拡がり考察したものだ。「リブレイズメント」という、マイケル・エメリックの要語⁴にも言及している。

その上で、2015年にフランスで出版されて話題を呼び、邦訳は2020年に発表された、ローラン・ビネ『言語の七番目の機能⁵』の超現代的設定を祖上にのせた。この小説は、1980年3月下旬のロラン・バルトの交通事故死をめぐる陰謀論をフィクションとして描き出し、「二十世紀後半の世界の思想界を牽引したフランス現代思想を代表する錚々たる作家、哲学者が実名で登場する——ミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、フィリップ・ソレルス、ジュリア・クリステヴァ、BHLことベルナール＝アンリ・レヴィ、アルチュセール、ドゥルーズ、ガタリ、ラカン、挙げていくと切りがない。のみならず政界からは、第二十一代フランス共和国大統領のフランソワ・ミッテランとのちに最初の内閣の閣僚を務める取り巻きたち、その政敵たる第二十代大統領のヴァレリー・ジスカール・デスタンも登場する。だが、この作品は「歴史小説」でもなければ、ノンフィクションでもない。純然たる「小説」なのである(同書「訳者あとがき」という奇想天外の物語だ。

上記には名前が挙げられていないが、ジュディス・バトラーも重要な？役割を演じ

⁴ Michael Emmerich, *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature*, Columbia University Press, 2015参照。

⁵ Laurent Binet *La septième fonction du langage*. 以下、高橋啓訳(東京創元社, 2015)の邦訳による。

る。詳しくは一読を乞うとして、この本は、あたかも歌舞伎の登場人物と〈世界〉のごとく、1980年代を舞台に、私自身が大学院生だった昔に愛読した思想家たちを〈キャラクター〉化している。忠臣蔵でも観るように、いささかあくどく楽しむことができる作品だ、と私は考えたのである。

しかも物語は、サスペンス仕込みだ。舞台も、パリ、ボローニャ、イサカ、ヴェネツィア、ナポリと、ヨーロッパからアメリカまで、時空を自在に渡り、歴史的な学会まで登場する。知らない名前や思想も何のその。Wikipediaを初めとするネット情報をこっそり参照すれば、読解にさほど不自由はない。世界観の補完はたやすい。(荒木前掲「序」)

ところで、この小説の日本語版の帯には「エーコ+「ファイトクラブ」を書いたかった——L・ビネ」と記される。作者の〈趣向〉は『ファイト・クラブ(Fight Club)』という小説(もしくは映画)にあったようだが、より重要なことは、この小説の本当のキーパーソンが、ウンベルト・エーコであると、作者自らによって表明されたことだ。

かつて〈モデルリーダー〉という概念を掲げ、記号論学者として作品論を展開したエーコは、『薔薇の名前』(一九八三年)という難解な小説を世に出して大ベストセラー作家となり、自身がオーサーとなって、リーダーと向き合う。そして自身の小説の映画化を経て原作者ともなり、映画制作集団の一翼を担って、オーディエンスとも対峙した。その後『フーコーの振り子』(一九八九年)の出版によって得た読者との交流をめぐる興味深い経験の実験は、ユニークな講義の素材となり、作品分析を森の中の散歩にたとえながら、〈モデルリーダー〉と〈モデルオーサー〉という造語を応用して論じた記録として残る。(荒木前掲「序」⁶)

「作者」と「読者」をめぐる問題は、今日でもかたちを変えて、ホットな話題である⁷。

2 〈キャラクター〉から〈文学遺産〉そしてモデルリーダー論へ

ところで上記の荒木「序」の中で「記録」として言及したのは、ウンベルト・エーコの *Six Walks in the Fictional Woods* (邦訳は『小説の森散策』)という興味深い講義録である⁸。エーコは、この『小説の森散策』において、作者として、みずからと読者との関わ

⁶ 以上の引用は、荒木浩「序 〈キャラクター〉と〈世界〉の大衆文化史」(荒木浩・前川志織・木場貴俊共編『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』(KADOKAWA, 2022)の紙媒体の書ではpp.7-27.に相当する。

⁷ シラネ他編『〈作者〉とは何か——継承・占有・共同性』(岩波書店, 2021)他参照。

⁸ Eco Umberto. *Six Walks in the Fictional Woods*. The Charles Eliot Norton lectures, 1993, Harvard University Press, 1994. 引用はペーパーバック版(1995)による。邦訳は、ウンベルト・エーコ『小説の森散策』和田忠彦訳(岩波文庫, 2013)。なおエーコ最後の文学論集も近時『文学について』(和田忠彦訳、岩波書店、

りにおいて、創作(フィクション)の投影として紡ぎ出された、興味深い体験を記している。まずはその創作の工夫について。

『フーコーの振り子』第115章、登場人物カゾボンが、1984年6月23日から24日にかけての深夜、パリ国立工芸院で悪魔の儀式を目撃したあと、放心状態のまま、サン・マルタン街を抜け、オズルス街を突っ切ってポーブルへ、それからサン・メリ協会へとたどりつき、そこからさらにあちこち、こまごま名前の付いた通りをさまいよながら、最後はヴォージュ広場に到着するという場面があります。この章を書くためにわたしは、幾晩も、テープレコーダーを片手に、目にする物事や印象を記録しながら、同じ道りを繰り返したどってみました。

それどころか、緯度と経度を特定すれば、いついかなる時点の天空も描き出してくれるコンピュータ・ソフトが手元にあったものですから、その晩は月が出ていたのか、出ていたとすれば、時間によって見える位置はどう変わったのか、そんなことまで懸命になって知ろうとしました。なにもリアリズムが気に懸かっていたわけではありません。エミール・ゾラではないのですから。ただ物語を作るときには、自分が語ろうとする空間を目の前に置いておきたいだけなのです。そうすることで物語がなにかしら親密に思えて、登場人物の内面に入っていくことができるからです⁹。

ところが、出版された作品について、読者から懇切な手紙が届いた。わざわざパリの国立図書館まで出かけて、上記の出来事が描かれた日付の新聞をすべて精読したその男性読者は、小説の舞台となった「サン・マルタン通りとたしかに交差しているレオムール通りで、真夜中過ぎ、つまりカゾボンが通過したのとほぼ同時刻に、火災があったことを発見し」、「カゾボンがそれを目撃しなかったのは変ではないかと」「訊ねてきた」というのだ。それは、私の用語で言えば、まさしく〈文学遺産〉の問題だ。関連部分を原著の英語版で引用しよう。

After publishing the novel, I received a letter from a man who had evidently gone to the Bibliothèque Nationale to read all the newspapers from June 24, 1984. He had discovered that on the corner of the rue Réaumur (which I hadn't actually named but which does cross the rue Saint-Martin at a certain point), after had been a fire—and a big fire at that, if the papers had talked about it. The reader asked me how Casaubon had managed not to see it¹⁰.

「この読者が全面的にまちがっているわけではないのです。わたしの物語が現実のパリを舞台にしているのだとかれに信じこませたのはわたしですし」としながら、エーコ

2020)として刊行された。

9 エーコ『小説の森散策』第4章, pp.140-141.

10 Eco, *Six Walks in The Fictional Woods*, Four possible woods, p.76.

は、同じく、その小説の中に出てくる(あるはずもない)パリの居酒屋を見つけ出し、写真を撮って報告してきた二人の美学生もいたことを紹介する。こちらのエピソードの一連は、次章で言及する「テキスト遺産」をめぐる研究論集の冒頭に引用したことがある。それに従い、ここでは続けて日本語で掲載しよう。

……パリ美術学校の学生ふたりが数カ月前にやってきて、一冊のアルバムを見せてくれました。小説(=『フォーコーの振り子』)のなかに名前が出てくる場所に、いちいち足を運んで、あの晩と同じ時刻に写真におさめ、私の登場人物の足取りを細大漏らさず再構成したのです。それどころか、第114章の最後で、地下水路を抜けたカゾボンが地下室から階段を上がると、どこかの中近東風の居酒屋に出た、汗ばんだ顔の常連客のいきれと、脂ぎった串焼きのにおいのなかをビールのジョッキが行き交っていた、とそんな調子で私が書いた、その居酒屋の内部まで撮影してきたのです。私はそんな居酒屋が実際あることなど知らずに、あの界限に軒を連ねる同じような居酒屋を思い浮かべながら創り出したのです。ところがふたりは紛れもなく、わたしが小説のなかで描いた居酒屋を発見したのです。この学生たちはなにも、モデル読者としての義務より、経験的読者としての関心、つまり私の小説が本物のパリを描いているかどうか点検したいという気分を優先させたわけではありません。ふたりは、本物のパリがわたしの小説の場所になることを願ったのです。そして事実ふたりは、——パリで目にするのできるあらゆるものなから——わたしの描写と合致する側面だけを抽出したわけです¹¹。

上記で主要な傍線部分についてのみ、原文を引いておく。

Two students from the Ecole des Beaux Arts in Paris recently came to show me a photograph album in which they reconstructed the entire route taken by my character Casaubon, having photographed, at the same time of night, each of the places I had mentioned.

…but those two students had undoubtedly discovered the bar described in my book. It's not that they had superimposed on their duty as model readers the concerns of the empirical reader who wants to verify that my novel described the real Paris. On the contrary, they wanted to transform the "real" Paris into a place in my book and of all that they could have found in Paris, they chose only those aspects that corresponded to my description¹².

これらは、マーガレット・ミッチェルを悩ませた、読者のモデル詮索につながるものである¹³。ミッチェルは、作者からの解消提案として「わたしのキャラクターは、た

11 エーコ『小説の森 散策』第4章, pp.161-162.

12 Eco, *Six Walks in The Fictional Woods*, Four, pp.86-87.

13 論点は異なるが、エーコは本書の第4章と6章で、『風と共に去りぬ』のスカレット・オハラやレット・

んなる合成物(コンポジット)です」とネガティブに告白・宣言していた。しかしエーコのパースペクティブにおいて、それは「モデル読者」論へと転じ、さらに、作者・エーコ自身の小説が生み出した〈文学遺産〉の問題へとつながっていく。このことこそ、本稿において、私には注目される展開なのである。

エーコは、「この青年たちは、現実のパリというかたちの定まらない広大な世界に、ひとつのかたちをあたえようとして、小説を利用したのです」と解説し、それは物語の癒やしの機能である、と敷衍する。

They used a novel to give form to that shapeless and immense universe which the real Paris is. They did exactly the contrary of what Georges Perec did when he tried to represent everything that happened in the place Saint-Sulpice in the course of two days. Paris is far more complex than the locale described by Perec and the one described in my book. But any walk within fictional worlds has the same function as a child's play. Children play with puppets, toy horses, or kites in order to get acquainted with the physical laws of the universe and with the actions that someday they will really perform. Likewise, to read fiction means to play a game by which we give sense to the immensity of things that happened, are happening, or will happen in the actual world. By reading narrative, we escape the anxiety that attacks us when we try to say something true about the world.

This is the consoling function of narrative—the reason people tell stories, and have told stories from the beginning of time. And it has always been the paramount function of myth: to find a shape, a form, in the turmoil of human experience¹⁴.

傍線部以下を日本語訳でも示しておこう。

……物語世界を散策することは、子どもにとっての遊びと同じ機能を担っています。子どもたちは、人形やおもちゃの木馬や凧を使って遊びながら、物理の法則や、いつかは新見に取り組まざるをえない行動といったものに馴染んでいくものです。同様に、物語を読むことも、遊びなのです。この遊びを通して、過去・現在・未来にまたがる現実世界の無限の事象に意味をあたえることを学ぶのです。小説を読むことによって、わたしたちは、現実世界について何か真実を言おうとするときに感じる不安から逃れるのです。

これが物語の治癒機能であり、人類が原始以来、物語をつくりつづけてきた理由なのです。それはまた、神話のもつ最高機能、すなわち混沌とした経験にかたちをあたえる機能でもあるのです¹⁵。

バトラーなどにいくどか言及している。興味深い連鎖である。

14 Eco, *Six Walks in The Fictional Woods*, Four, p.87.

15 エーコ『小説の森 散策』第4章, p.162.

「遊び」、「子ども」、「過去・現在・未来にまたがる現実世界の無限の事象に意味をあたえること」、そして「神話のもつ最高機能、すなわち混沌とした経験にかたちをあたえる機能」。いかにも示唆的な文言の連なりである。

そしてここでエーコは、作者からの視点、愛読者が勝手に妄想した文学遺産の虚像、しかしそれ故のテキストの癒やし機能と、論を展開する。それはかつてH. R. ヤウスが「文学の社会的機能は、読者の文学体験が読者の生の実践の期待の地平に加わり、彼の世界理解を前もって形成し、それによって彼の社会的行動にも働き返す場合に、初めてその本来の可能性を顕現するのである」と述べた示唆的な「期待の地平 Erwartungshorizont」の概念¹⁶とも結びつき、議論の可能性を広げるであろう。

3 〈文学遺産〉としての『源氏物語』から『平家物語』へ

こうした文学の現実の架構性、あるいは〈文学遺産〉というプロブレマティーク。それは、いくつかの契機を経て、直接的にはヴェネツィア・カ・フォスカリ大学のEdoardo GERLINI(エドアルド・ジェルリーニ)による「テキスト遺産」というプロジェクトの提言を受けて、私の中に問題化された。その詳細は、Edoardo GERLINI・河野貴美子編『古典は遺産か？ 日本文学におけるテキスト遺産の利用と再創造¹⁷』を参照されたいが、同書の中で、私は「明石における龍宮イメージの形成——テキスト遺産としての『源氏物語』と『平家物語』をつなぐ夢」を書いている。

『平家物語』灌頂の巻で、平家の壇ノ浦の敗北から源義経の軍勢に引き連れられて瀬戸内海を帰京する建礼門院が、なぜか明石で、竜宮にいる母・二位尼、子・安徳前帝以下、平家の人々の姿を夢に見たと、後白河に語り、彼らの安楽と往生を願う、と物語られる。護送される建礼門院の帰京の旅路で、彼女の行動が具体的に示されるのはここだけだ。つまり、夢見という皮肉ながら、ここは、帰路において、唯一の建礼門院の視覚表象となっているのだ。

この逸話を分析し、それは、他ならぬ『源氏物語』に描かれた明石と夢をめぐる〈文学遺産¹⁸〉である、と私なりに考えたのが旧稿である。たとえば次の著名な連歌を参照されたい。

はかなきも頼みかけたる夢語り 叱
おもひに永き夜は明石がた 秀

¹⁶ H. R. ヤウス著、轡田収訳『挑発としての文学史』(岩波書店, 1976), pp.66-7、また同書「日本語版への序文」p.X参照。

¹⁷ アジア遊学261(勉誠出版, 2021年10月)

¹⁸ ただし、同上論集においては、プロジェクトの統一性を図る趣旨で、一括、「テキスト遺産」と転じられている。ここでは原案に即して論じていく。

これは「天正十年愛宕百韻」の中の連歌である。明智光秀が本能寺の変を執行する意図を固めたことの傍証として議論される発句「ときは今天が下しる五月哉」を有することでよく知られる作品だ。「叱」は唱叱で紹巴門下の人。「秀」は明智光秀である。この連歌の連想については『源氏物語』明石の巻に見える。故桐壺帝の告によって光源氏が須磨から明石におもむいたことにより、「夢語り」に「明石がた」と付くと島津忠夫が注解する通りである¹⁹。

その背景を少し詳しく掘り下げれば、『源氏物語』若紫巻で「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほ、殊に侍れ²⁰」と叙述され、明石には「海龍王の后になるべき、いつきむすめ」がいるとの噂が紹介される。後に登場する明石の入道の娘のことで、「海の中の龍王」という言葉も、須磨巻と明石巻に見える。須磨巻末尾では、荒れ狂う須磨の暴風雨に「さは、海の中の龍王の、いたく物めでするものにて、見いれたりけるなり」という描写がある。そして須磨へ謫居することになった光源氏が、父桐壺帝の墓前を弔うと、夢に、父帝が出現するのである。

須磨移住後に、明石巻で、ふたたび父が夢に現れ、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出して、この浦を去りね」と更なる転居を誘った。この父帝出現の翌日、突然明石の入道が「去ぬる朔日の日、夢にさま異なるものの告げ知らすことはべりしかば、信じがたきことと思つたまへしかど」と光源氏を迎えに来る。「御夢なども思合はすることもありて」予感のあった光源氏は「夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとか疑はむ」と明石移住を決意した。

こうした須磨・明石と夢と竜宮の連想が、建礼門院の夢を生み出す〈文学遺産〉となって、覚一本『平家物語』という語り本の重要な最終段・灌頂の巻に形象される。そしてこの『源氏物語』が示す「明石」というトポスと海龍王の住まい＝「竜宮」の存在という視点と言述は、母と子を失い、船底の闇の中で敗走しする建礼門院と平家の一族にとって、エーコのことばを援用して「現実世界について何か真実を言おうとするときに感じる不安から逃れ」ようとする「自覚的使用」であると説明することができるだろう。そして国母となる栄華と、武士による捕獲・移送という屈辱を体験した建礼門院が、六道語りとして「過去・現在・未来にまたがる現実世界の無限の事象に意味をあたえること」になった、とこちらもエーコの説明が応用できる。本稿において、上記のエピソードを、あらためてこのように読み替えるならば、なによりも建礼門院の明石での夢見は、すべてを失った建礼門院にとってのまさしく「物語の治癒機能」であったと言えるのである。

¹⁹ 引用は、本文ともに新潮日本古典集成『連歌集』 pp.328-329.

²⁰ 『源氏物語』の引用は、新潮日本古典集成による。

4 芭蕉におけるフィクショナルな『源氏物語』と『平家物語』の〈文学遺産〉

さらに、もう一段階、参照すべき例がある。如上の『源氏物語』を内包して重層する『平家物語』という名作古典の受容を通じて、新たなる〈文学遺産〉が生み出された。芭蕉の紀行文『笈の小文』に次のような一節がある。

明右夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かかる所の種なりけりとかや。此浦の実は、秋をむねとするなるべし。かなしさ、さびしさいはむかたなく、秋なりせば、いささか心のはしをいひひびき物と思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり。淡路嶋手にとるやうに見えて、すま・あかしの海右左にわかる。呉楚東南の詠もかかる所にや。物しれる人の見侍らば、さまざまの境にもおもひなぞらふるべし。

又後の方に山を隔てて、田井の畑といふ所、松風・村雨ふるさとといへり。尾上つづき、丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき・逆落など、おそろしき名のみ残て、鐘懸松より見下に、一ノ谷内裏やしき、めの下に見ゆ。其代のみだれ、其時のさはぎ、さながら心にうかび、篋につどひて、二位のあま君、皇子を抱奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有さま、内侍・局・女孺・曹子のたぐひ、さまざまの御調度もてあつかひ、琵琶・琴など、しとね・ふとんにくるみて船中に投入、供御はこぼれて、うろくづの餌となり、櫛笥はみだれて、あまの捨草となりつつ、千歳のかなしび此浦にとどまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや²¹。

ここにはいくつものフィクションと〈文学遺産〉、そして〈キャラクター〉が潜む。「すま・あかしの海右左にわかる」というポーターへの自覚も興味深いが、まずこの紀行文の実態については、芭蕉の書簡が残されており、読者ならぬ芭蕉本人による虚構が浮かび上がる。

十九日(甲)あまが崎出船。兵庫に夜船。相国入道の心を尽されたる経の嶋・わだの御崎・わだの笠松・内裡やしき・本間が遠矢を射て名をほこりたる跡などきゝて、行平の松風・村雨の旧跡、さつまの守の六弥太と勝負し玉ふ旧跡かなしげに過て、西須磨に入て、幾夜寝覚ぬとかや関屋のあとも心とまり、一ノ谷逆落し・鐘掛松、義経の武功おどろかれて、てつかひが峰にのぼれば、すま・あかし左右に分れ、あはち

²¹ 引用は、岩波文庫『芭蕉紀行文集』の『笈の小文』より。

嶋・丹波山、かの海士が苦里田井の畑村など、めの下に見おろし、笑望の皇居はすまの上野と云り。其代のありさま心に移りて、女院おひかかへて舟に移し、笑望を二位殿の御袖によこだきにいだき奉りて、宝剣・内侍所あはたたくはこび入、あるは下々の女官は、くし箱・油壺をかかへて、指櫛・根巻を落しながら、緋の袴にけつまづき、ふしまろびたるらん面影、さすがにみるこ地して、あはれなる中に、敦盛の石塔にて泪をとどめ兼候。(中略)すま寺の淋しさ、口をとちたる斗に候。蟬折・こま笛、料足十疋、見るまでもなし。この海見たらんこそ物にはかへられじと、あかしより須磨に帰りて泊る。(二四 惣七(猿雖)宛(元禄元年(貞享五年)四月二十五日付)書簡²²)

この芭蕉の書状は「『笈の小文』の旅の足取りがたどれる」「重要」資料なのだが、驚くことに引用部分の末尾には「あかしより須磨に帰りて泊る」と書いてある。芭蕉は、そもそも明石に泊まっていなかったのである。『笈の小文』が「明石夜泊」と題していたこと自体が「虚構と知られる²³」記録なのだ。芭蕉が行ったこのフィクションには、一ノ谷逆落し以下の故地を散策しながら「須磨では平家の悲劇を眼前に見る思いで涙したと告げ、無常迅速を痛感したとの旅懐を述べており興味深いものがある」と注釈書が説明するように²⁴、どうやらここにも、エーコのいう、癒やしの力があるようだ。

ただし芭蕉のフィクションは、宿泊をめぐる「虚構」にとどまらない。文学修辞とも微妙に重なる、多くのこしらえがある。たとえば『笈の小文』に「かかる所の種なりけりとかや。此浦の実は、秋をむねとするなるべし。かなしさ、さびしさいはむかたなく」とあるのを読むと、まるで芭蕉は「秋」に須磨を訪れたかのようだが、その文章は「秋なりせば」と仮定形で承けられている。注釈書の現代語訳が「「またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」とは、かの光源氏の須磨での所懐であったが、この浦の風情はそのとおり、ことに秋を心におこななければならない。ただ、夏のこの時期にあっても、浦々のかなしさ、さびしさはたとえようもなく、もし、秋にこの地に居合わせたならば、いくばくかの拙い感想も表現できたものと思うが、才に乏しくわが身につまされるばかりである²⁵」と「夏」を補うように、「はかなき夢を夏の月」と芭蕉自身が詠むように、そしてまた上記書簡のとおり、芭蕉の訪れは、旧暦の四月、初夏のことであった。それが秋に焦点を当てて描かれる理由は、岩波文庫『笈の小文』の脚注が「「須磨にはいとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の関吹き越ゆるといひけむ浦波、夜夜はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」(源氏物語・須磨)、による」と記す²⁶とおり、『源氏物語』の風情を響かせてい

22 本文の引用は、岩波文庫『芭蕉書簡集』。

23 引用は、前掲『芭蕉書簡集』脚注56, p.63.

24 引用は、前掲『芭蕉書簡集』章段解説, p.60.

25 引用は、大宅他『笈の小文の研究 評釈と資料』「通釈」(和泉書院, 2019), p.208.

るからである。続いて描かれる「田井の畑といふ」「松風・村雨ふるさと」とは、「謡曲「松風」にある」「行平の寵を受けたという海女の姉妹のふるさと²⁷」であるが、これも『源氏物語』の同上「行平の中納言の関吹き越ゆるといひけむ浦波」を受けての文学風景である。

そして『笈の小文』では、続けて一ノ谷が描かれ、『平家物語』の世界へと至る。『源氏物語』のゆかりから、ごく自然な地誌として「尾上つづき、丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき・逆落など、おそろしき名のみ残りて、鐘懸松より見下に、一ノ谷内裏やしき、めの下に見ゆ」と続き、『平家物語』時代の安徳天皇内裏伝承跡へとつながっていく。

ただし、ここにも虚構があった。続いて描かれる「其代のみだれ、其時のさはぎ、さながら心にうかび、侘につどひて、二位のあま君、皇子を抱奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有さま、内侍・局・女孺・曹子のたぐひ、さまざまの御調度もてあつかひ、琵琶・琴など、しとね・ふとんにくるみて船中に投入、供御はこぼれて、うろくづの餌となり、櫛笥はみだれて、あまの捨草となりつつ、千歳のかなしび此浦にとどまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや」という、一ノ谷脱出の船内の混乱の描写は、一見いかにもリアルだが、じつは『平家物語』とは似て非なるものである。

『平家物語』が語る一ノ谷の戦いとその混乱は、巻九「逆落^{さかたれ}」以降に見える。だが、そこで叙される建礼門院やその母・二位の尼、そして皇子(安徳天皇)の敗走などについての描出は、芭蕉の引用とは全く異なっていた。

『平家』では、一ノ谷奇襲での大混乱を承け、「平氏の軍兵^{いくさへい}どもあまりにあわてさわいで、若たすかると、前の海へぞおほくはせ入りける。汀^{あな}にはまうけ舟いくらもありけれども、われさきに乗らうど、舟一艘には物具^{ものぐ}したる者どもが四五百人、千人ばかりこみ乗らうに、「汀よりわづかに三町ばかりおし出して、目の前に大ふね三艘^{さんそう}しづみにけり。其後は、「よき人をば乗すとも、雑人^{ざふにん}どもをば乗すべからず」と選別が行われ、「太刀・長刀^{たがひ}で打ち払ったけれども、「乗せじとする舟にとりつき、つかみつき、或はうでうちきられ、或はひぢうち落されて、一の谷の汀に」、血にまみれて真っ赤になって、怪我人・死体が「並み伏したる」悲惨だった。そしてその後『平家』巻九は、「越中前司最期」「忠教最期」「重衡生捕」「敦盛最期」「知章最期」と章を重ね、多くの戦いと戦死が綴られるが、肝心の主上・安徳天皇以下の敗走については、続く「落足」で次のように語られるのみである。

26 岩波文庫『芭蕉紀行文集』脚注6, p.89.

27 同上『芭蕉紀行文集』脚注10, p.89.

いくさやぶれにければ、主上をはじめたてまつて、人々みな御舟にめして出給ふ、心のうちこそ悲しけれ。塩にひかれ、風に随つて、紀伊路へおもむく舟もあり。葦屋の沖に漕出でて、浪にゆらるる舟もあり。或は須磨より明石のうらづたひ、泊定めぬ梶枕、かたしく袖もしほれつつ、朧にかすむ春の月、心をくだかぬ人ぞなき。(下略²⁸)

そして以下、哀愁に満ちた平家の敗走が描かれていくが、一ノ谷では、芭蕉の描く女性達の大混乱はない。むしろ、芭蕉の描写に見紛うのは、寿永三年(1184)二月七日の一ノ谷の逆落しの翌年、寿永四年三月二十四日の壇ノ浦での、次のごとき哀切な最期の記述ではなかったか。少し長いが引用する。

源氏のつは物共、すでに平家の舟に乗り移りければ、水手・梶取ども射殺され、きり殺されて、舟をなほすに及ばず、舟そこにたはれ臥しにけり。新中納言知盛卿、小舟に乗つて、御所の御舟に参り、「世のなかは、今はかうと見えて候。見ぐるしからん物共、みな海へ入れさせ給へ」とて、ともへにはしりまはり、はいたり、のごうたり、塵ひろひ、手づから掃除せられけり。女房達、「中納言殿、いくさはいかにや、いかに」と口々にとひ給へば、「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ」とて、からからとわらひ給へば、「なんでうのただいまのたはぶれぞや」とて、声々にをめきさけび給ひけり。

二位殿は、このありさまを御らんじて、日ごろおぼしめしもうけたる事なれば、にぶ色のふたつきぬうちかづき、ねりばかまのそばたかくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだきたてまつて、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかかるまじ。君の御ともに参る也。御心ざし思ひまゐらせ給はん人々は、急ぎつづき給へ」とて、ふなばたへあゆみ出でられけり。主上、ことしは八歳にならせ給へども、御としの程よりはるかにねびさせ給ひて、御かたちうつくしく、あたりもてりかかやくばかり也。御ぐしくろうゆらゆらとして、御せなか過ぎさせ給へり。あきたる御さまにて、「尼せ、われをばいづちへ具してゆかむとするぞ」と仰ければ、いとけなき君にむかひたてまつり、涙をおさへて申されけるは、「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御ちからによつて、いま万葉のあるじとむまれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。まづ東にむかはせ給ひて伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西方浄土の来迎にあづからむとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし。この国は葉散辺地とて、心うきさかひにてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき処へ具しまいらせさぶらふぞ」となくなく申させ給ひければ、山鳩色の御衣に、びん

28 『平家物語』の引用は、新日本古典文学大系による。

づらゆはせ給ひて、御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしをがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがていただき奉り、「浪のしたにも都のさぶらふぞ」となぐさめたてまって、ちいろの底へぞ入給ふ。(『平家物語』巻十一「先帝身投」)

女院は、この御ありさまを御らんじて、御やき石・御硯、左右の御ふところに入れて、海へ入らせ給ひたりけるを、渡辺党に源五馬允むつる、たれとは知りたてまつらねども、御ぐしをくま手にかけてひきあげたてまつる。女房達、「あなあさまし。あれは女院にてわたらせ給ぞ」と声々、口々に申されければ、判官に申て、急ぎ御所の御舟へわたしたてまつる。(同「能登殿最期」)

すなわち芭蕉の眼前には、『平家物語』の〈文学遺産〉として、一ノ谷逆落しの描写と、壇ノ浦での平家敗退・入水とが折り重なって現出していた。ただしそれは、『笈の小文』という文学的紀行文の意図的なフィクションに留まらない。

さきには『笈の小文』のフィクションを暴いたはずの芭蕉書簡において、すでに「天皇の皇居はすまの上野と云り。其代のありさま心に移りて、女院おひかへて舟に移し、天皇を二位殿の御袖によこだきにいただき奉りて、宝剣・内侍所あはたしくはこび入、あるは下々の女官は、くし箱・油壺をかへて、指櫛・根巻を落しながら、緋の袴にけつまづき、ふしまろびたるらん面影、さすがにみるこゝ地して、あはれなる中に、敦盛の石塔にて泪をとどめ兼候」と記されており、『笈の小文』の混乱の原型が描かれてしまっているからだ。

パリの火事を問いかけ、フィクショナルなバーを見つけて写真を送りつけてきたエーコの「モデルリーダー」とはまた別種の、しかしどこかで重なる想像力だ。そもそも『平家物語』自体の一ノ谷形象にも、しかるべき歪みが想定されるが²⁹、それとは別に、ここにはまさしく〈文学遺産〉としての『源氏物語』→明石の入道と娘、竜宮伝承→壇ノ浦敗退、護送、建礼門院と明石の夢・竜宮の母・子・平家一族→『平家物語』灌頂巻へ、という〈文学遺産〉のめくるめく享受の重層がある。その文化伝統の層状が、芭蕉に、ありありと一ノ谷後の船中で顛倒する二位の尼以下を、須磨・明石の海上に彷彿とさせたのである、と考えられよう。それは優れた読者の〈文学遺産〉創造の営みであった。

29 富倉徳治郎『平家物語全注釈』下(一)(角川書店、1967)補注「鴨越という地名について」、pp.145-148。また鈴木彰『平家物語の展開と中世社会』(汲古書院、2006)など参照。

5 〈文学遺産〉と〈キャラクター〉その後の展開へ

かくして本稿後半では、各論として、少し問題を絞って議論を進めてきた。各論としては、ここから『伴大納言絵巻』と、その起因説話³⁰である伴善男の「西大寺」と「東大寺」を跨いだ夢の説話の行方をめぐる、「西の大寺」「東の大寺」同定と奈良・京都の関係、また焼失した西寺と東寺との関係などを取り上げながら、正面切って描かれざる『伴大納言絵巻』中の「善男」というキャラクターと、起因説話の関係を論じたいとも思っていた。

さらに、鴨長明『方丈記』の「方丈」という架空空間(組み立て式)の縁由(維摩故事の方丈の遺跡のインドでの発見)から、〈文学遺産〉という用語を自覚的に用いた拙稿「唐物」としての「方丈草庵——維摩詰・王玄策から鴨長明へ³¹」の末尾を承け、次の14世紀前半の和歌のように、

鴨長明とやまの方丈にかきつけ侍りし
くちはてぬその名ばかりとおもひしに あとさへのこる草のいほかな³²

と「あとさへのこる」と描かれた、後世の方丈庵の遺跡化の逆転という皮肉の問題など、さらに考察すべき論点を有する。だが、以上は、またしかるべき準備を重ね、別の機会を得て、分析を進めていきたいと、いまは考えている。

参考文献(Bibliography)

著書・論文

荒木浩(2022)「序 〈キャラクター〉と〈世界〉の大衆文化史」、荒木浩・前川志織・木場貴俊共編(2022)『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』。東京：KADOKAWA, pp.7-27. Araki, Hiroshi(2022) Jo (Character) to (Sekai) no Taishū Bunkashi (Character) no Taishū Bunka : Denshō, Geinō, Sekai, Co-ed. Araki, Hiroshi, Maekawa, Shiori, Kiba, Takatoshi, Tokyo KADOKAWA, pp.7-27.

荒木浩(2021)「明石における龍宮イメージの形成——テキスト遺産としての『源氏物語』と『平家物語』をつなぐ夢」GERLINI, Edoardo・河野貴美子編『古典は遺産か? 日本文学におけるテキスト遺産の利用と再創造』アジア遊学261, 東京: 勉誠出版. Araki, Hiroshi(2021) Akashi ni okeru Ryūgū Image no Keisei : Text Isan toshitenō Genjimonogatari to Heikemonogatari wo Tsunagu Yume, Asia Yugaku 261, GERLINI, Edoardo, Kono, Kimiko. Koten ha Isanka?: Nihon Bungaku niokeru Text Isan no Riyō to Saisōzō Tokyo: Bensei Shuppan.

30 『江談抄』、『古事談』、『宇治拾遺物語』他に載り、その「大寺」の比定に議論がある。荒木『京都古典文学めぐり 都人の四季と暮らし』(岩波書店, 2023)他参照。

31 河添房江・皆川雅樹編『「唐物」とは何か——舶載品をめぐる文化形成と交流』アジア遊学275(勉誠出版, 2022)所収。

32 『新編国歌大観』(ジャパナレッジ)所収。「建武元年(一三三四)暮れの夢想により和歌所へ進呈すべく自撰したもの」(『新編国歌大観』解題)という法印公順の家集『拾藻鈔』第八雑歌上(350番)。

- 荒木浩 (2023) 『京都古典文学めぐり 都人の四季と暮らし』. 東京: 岩波書店. Araki, Hiroshi (2023) *Kyōto Kotenbungaku Meguri: Miyakobito no Shiki to Kurashi* Tokyo: Iwanamishoten.
- 荒木浩 (2022) 「(唐物)としての「方丈草庵」——維摩詰・王玄策から鴨長明へ」河添房江・皆川雅樹編『(唐物)とは何か——舶載品をめぐる文化形成と交流』アジア遊学275. 東京: 勉誠出版. Araki, Hiroshi (2022) (Karamono) toshiteno 'Hōjō Sōan': Yuimakitsu, Ōgensaku kara Kamo no Chōmei he, Asia Yugaku 275. Kawazoe, Fusae, Minagawa, Masaki ed. 'Karamono' toha Nanika: Hakusaihin wo meguru Bunkakeisei to Kōryū Tokyo: Bensei Shuppan.
- ビネ, ローラン著, 高橋啓訳 (2015) 『言語の七番目の機能』. 東京: 東京創元社. Binet, Laurent (2015) *Gengo no Shichibanme no Kinō (La septième fonction du langage)*, trans. by Takahashi, Kei. Tokyo: Tokyo Sogensha.
- エーコ, ウンベルト著, 和田忠彦訳 (2013) 『小説の森散策』. 東京: 岩波書店. Eco, Umberto (2013) *Shōsetsu no Mori Sansaku* trans. by Wada, Tadahiko Tokyo: Iwanamishoten.
- エーコ, ウンベルト著, 和田忠彦訳 (2020) 『文学について』. 東京: 岩波書店. Eco, Umberto (2020) *Bungaku ni Tsuite* trans. by Wada, Tadahiko Tokyo: Iwanamishoten
- シラネ, ハルオ, 鈴木登美, 小峯和明, 十重田裕一編 (2021) 『(作者)とは何か——継承・占有・共同性』. 東京: 岩波書店. Shirane, Haruo, Suzuki, Tomi, Komine, Kazuaki, Toeda, Hirokazu (2021) (Sakusha) toha Nanika: Keishō, Senyū, Kyōdōsei. Tokyo: Iwanamishoten.
- 鈴木彰 (2006) 『平家物語の展開と中世社会』. 東京: 汲古書院. Suzuki, Akira (2006) *Heikemonogatari no Tenkai to Chūsei-shakai* Tokyo: Kyūkokushoin
- 富倉徳治郎 (1967) 『平家物語全注釈』下(一). 東京: 角川書店. Tomikura, Tokujirou Heikemonogatari Zen Chūshaku Tokyo: Kadokawashoten
- H. R. ヤウス著, 響田収訳 (1976) 『挑発としての文学史』. 東京: 岩波書店. Jauss, Hans Robert *Chōhatsu toshiteno Bungakushi*, trans. by Kutsuwada, Osamu (1976) Tokyo: Iwanamishoten.
- Emmerich, Michael (2015) *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature* New York: Columbia University Press.
- Eco, Umberto (1994) *Six Walks in the Fictional Woods: The Charles Eliot Norton lectures*. 1993 Cambridge: Harvard University Press. (first paperback, 1995)

古典資料および注釈

- 『源氏物語』. 石田穰二・清水好子校注 (1976-85) 『源氏物語』全八巻. 新潮日本古典集成. 東京: 新潮社. *Genjimonogatari* Ishida, Jouji, Shimizu, Yoshiko (1976-85) *Genjimonogatari* (vol.1-8). Shinchōnihonkotenshūsei Tokyo: Shinchosha.
- 『平家物語』. 梶原正昭・山下宏明 (1991-93) 『平家物語』新日本古典文学大系. 東京: 岩波書店. Kajiwara, Masaaki, Yamashita, Hiroaki (1991-93) *Heikemonogatari* (vol.1-2). Sinnihonkotenbungakutaikai Tokyo: Iwanamishoten.
- 『天正十年愛宕百韻』. 島津忠夫校注 (1979) 『連歌集』新潮日本古典集成. 東京: 新潮社. *Tenshōjūnen Atagohyakuin* Shimazu, Tadao (1979) *Rengashū*. Shinchōnihonkotenshūsei Tokyo: Shinchosha
- 芭蕉, 『笈の小文』. 中村俊定 (1971) 校注『芭蕉紀行文集 付嵯峨日記』岩波文庫. 東京: 岩波書店. Bashō, *Oinkobumi*. Nakamura, Shunjō (1971) *Bashō Kikōbunshū: Fu Saganikki* Iwanamibunko Tokyo: Iwanamishoten.
- 大安隆・小林孔・松本節子・馬岡裕子 (2019) 『笈の小文の研究 評釈と資料』. 大阪: 和泉書院. Daiyasu, Takashi, Kobayashi, Tooru, Matsumoto, Setsuko, Umaoka, Hiroko (2019) *Oinkobumi no Kenkyū: Hyōshaku to Shiryō* Osaka: Izumishoin.
- 芭蕉, 書簡. 萩原恭男校注 (1976) 『芭蕉書簡集』. 東京: 岩波書店. Bashō, Letters. Hagiwara, Yasuo (1976) *Bashō Shokanshū* Tokyo: Iwanamishoten
- 法印公順『拾藻鈔』『新編国歌大観』. 東京: ジャパンナレッジ. Hōin Kōjun, Shūsōshō *Shinpen Kokka Taikan*. Tokyo: Japan Knowledge.